

会派視察報告書

政友クラブ
代表:山本 みゆき
二條 孝夫
大竹 真千子
中村 直人
西澤 和保

期間:令和7年1月29日(水)から30日(木)まで(2日間)

査察地及び視察事項

- 長野県須坂市:賑わい創出拠点やまじゅう(創業支援、起業後の経営支援、チャレンジショップの管理運営、交流拠点の運営)、創業・起業支援に関するワンストップ交流拠点
- 長野県小諸市:①小諸市のMaaS(Mobility as a Service)の社会実験
②高野不動産のおしゃれ田舎プロジェクト について
- 道の駅・八千穂高原、道の駅 ヘルシーテラス佐久南

長野県須坂市:賑わい創出拠点やまじゅう



地域活性化のための交流拠点。この施設は、地域での起業や開業を目指す方々を支援するために設置される。地域の伝統的建造物を活用しており、地域の魅力を引き出しながら新たな挑戦を支援する場として注目されている。

- 目的: 地域の賑わいを創出し、起業や開業を目指す方々をサポートすること。
- 提供サービス: 飲食店やカフェ、雑貨店などの開業を目指す方向けに、レンタルキッチンや店舗スペースを提供。また、経営アドバイザーによる運営サポートや、創業支援セミナー

の開催も行っている。

- 施設内容: 飲食スペース、物販スペース、交流スペースなどがあり、将来的な開業に向けたテスト出店や地域交流の場として利用可能。
- 営業時間: 通常は 10:00~17:00 だが、利用目的に応じて柔軟に対応可能。
- 利用料金: 店舗利用は 1 日 1,000 円~2,000 円、月額 20,000 円~40,000 円など、用途に応じた料金設定あり。



《 所感 》

(山本 みゆき)

須坂市 社会共創部文化スポーツ課の寺沢隆宏課長、賑わい創出拠点やまじゅう統括責任者・経営アドバイザーの君島登茂樹氏に「賑わい創出拠点やまじゅう」の成り立ちと運営について伺いました。「賑わい創出拠点やまじゅう」は伝統的建造物が集まる町並み(重要伝統的建造物群保存地区)を活用し、操業を目指す方への経営支援、地域の交流と賑わいを創る拠点として、2022 年 7 月に須坂市が地域創生交付金を活用し、指定管理制度による管理運営を開始、同 9 月にオープンした施設です。飲食や物販のテスト出店が可能であり、経営アドバイザーによる運営のサポートも受けられます。また創業支援セミナーを定期開催しており、金融機関や地域の事業者と連携したイベントの開催に加え、個別での創業相談や開業への準備(資金調達・空き家物件の紹介等)など、専門スタッフによるサポート(無料)も行っています。地域の賑わいに繋がるイベント開催のための施設も併設しており、利用料金は須坂市の施設利用料金に準じてリーズナブルとなっています。

「賑わい創出拠点やまじゅう」の立ち上げには『市役所のキーマン』の存在が大きく関わっていると感じました。「まちの声を形にするため、縁の下の力持ちでありたい。」と話される寺沢課長は地域を隈なく歩き、地域の顔であり、地主情報の宝庫となっておられ、潜在的空き家の状態から「やまじゅう」に情報共有をされています。重要伝統的建造物保存地区選定の担当者でもあり、「やまじゅう」から開業希望者情報も逐一共有していると伺いました。また、空き家めぐりの際はアテンダーとして毎回案内をされるということであり、地域の信用は市の職員の重要な仕事であると認識するところです。民間事業者の君島氏と市役所職員の寺沢課長の存在が空き家を活用した新しいまちづくりを進めています。大町市でも行政と民間が共創のまちづくりに取り組むことを強く願います。

(大竹 真千子)

須坂市は蔵の残る住居や店舗などの歴史的建造物が多く残る街として、その活用を推進しており、やまじゅうさんは、須坂市より公共施設の管理運営業務の指定管理を受け、開業を目指すプレイヤーの育成や伴走支援をされていました。やまじゅうの君島社長は若干 36 歳で、長野県内で 6 店舗の飲食店経営と指定管理を1施設運営されていた。ご本人の異色の経歴から、各店舗での特徴的な動きについてお話を伺う中で、税理士ではないため、開業するプレイヤーに確実とっていい助言というのはできないとおっしゃっていたが、相談のあった方々の開業後の伴走支援をする中で、現在経営する店舗での異色の組み合わせで当たった経験や、コンサルティングの状況を生かしたアドバイスをされているようで、開業後の支援という形としては、心強い存在なのだと感じた。創業・起業、開業において、最終的な責任は経営者にあるものの、初めての人に伴走できる人材がいることは羨ましく、且つこういった人材をどのように確保するかは難しさを感じた。やまじゅうの動きの中で、当市に持ち帰ることが可能であると感じた点は、チャレンジショップの運営、空き施設(住居・店舗)のマッチングについては当市でも考えるべき点だと感じた。また、君島社長のような人材が見つからないのであれば、行政、金融機関、創業・起業支援アドバイザーの各業務の隙間をどのように埋めるかを考える必要があると感じた。

(二條 孝夫)

須坂市の指定管理施設創業支援拠点「やまじゅう」の視察を行った。

須坂市は中心市街地への創業支援事業を行うために、ひとつの民間事業者指定管理として支援事業を任せただことに非常に驚かされた。とかく市担当課や商工会議所などが多忙極める仕事の中で起業、創業支援対策をしているのが常であるが、ひとつの事業者指定管理に任せることによって、事業を起こしたい人の募集、相談、起業場所、起業職種の市場調査、製品政策のための手助け(オープンキッチン開設)資金繰り、事業を起こした後のアドバイス手助けが容易になり、いわゆるワンストップで起業支援を行うことが出来る。ここで特記したいことは、地元の金融機関も参加していることだ。現に視察時には融資担当銀行員も来て頂いて、説明をしていた。創業のための資金に関する情報は地元銀行が一番知っている。そのノウハウを使うことは今後最も重要なことだと感じた。

また指定管理を受けている合同会社 U.I.international 代表社員 君島登茂樹氏は須坂市ばかりでなく北信を中心に飲食業を創業している。様々な創業の苦難を経験していることからそのノウハウは素晴らしいものがあつた。地域を何とかしたいという情熱の塊みたいな人で様々な金融機関との信頼を受けている。この人と須坂市役所の商工関係者の情熱とが一致し「まるじゅう」が誕生した。やはり最後はやる人の熱量の高さが大事だと感じた。現在起業支援相談者47名、うち6件が創業、5件が開業予定であると説明を受けた。ほとんどが須坂市の中心市街地の中での創業である。中心市街地の空き家は100件、「やまじゅう」で把握している。もちろん須坂市職員との連携でこのような数字を出しているが、民間のその道のエキスパートと市職員の専任育成が大事と感じた。

(中村 直人)

当市でも若い移住者が起業を目指す例が近年ある。女性や若者の直近 3 年での企業数は8、相談中の件数は 50 弱ということで、敷居を下げた起業相談窓口は有効だと思う。伴奏型支援ということで、起業時だけではなく、創業後の不安な次期を支える仕組みがあることが重要だと感じた。「ビジネスプランとして成り立たないような提案があった場合はどうするか？」とお聞きすると、「精一杯アドバイスする中で、私のほうが熱量があるので、中途半端な取り組みしかない方は離れていく」という答えがあり、窓口になる方のモチベーションの高さを感じた。市、委託事業者、銀行と、チームで取り組むことの大事さを感じた。82 銀行さんの、「本来は銀行としても、地域の起業家を育てるような伴奏型のサービスを提供していきたいのだが、私たちも市も、実際には事業の経験が無く、現場を知っている方と一緒にやっているからこそ可能なサービスである」という発言が印象に残った。

(西澤 和保)

行政・支援団体・金融機関がそれぞれの役割をもって、各機関と連携して起業支援に取り組むことで、より具体的に、また、持続可能な方向性を導く体制は大いに評価できる。補助制度においても、町並みを保存する文化庁の補助制度を活用し、空き家等のオーナー(家主)へのメリットが生ずることは、貸し手側の立場においても維持管理と収益などの面から恩恵を受けられることも有効と思われる。いずれにせよ、新規起業を希望する方への支援事業をマッチングさせるキーマンの存在が非常に大きい。

長野県小諸市:①小諸市のMaaS(Mobility as a Service)の社会実験 ②高野不動産のおしゃれ田舎プロジェクト について



① 小諸市のMaaS(Mobility as a Service)の社会実験

小諸市では、MaaS(Mobility as a Service)を活用した社会実験が進行中で、地域の交通利便性向上や観光促進を目指しており、地域の交通と観光を一体化させる新しいモデルとして注目されている。その中でも、「縁 JOY！小諸」は、小諸市が地域の交通課題解決と観光振興を目的として実施している MaaS(Mobility as a Service)社会実験の名称であり、地域住民や観光客がより便利に移動できるよう、多様な交通手段を統合し、スマートフォンなどを通じて一括で検索・予約・決済が可能なサービスの提供を目指している。

《 所感 》

(山本 みゆき)

小諸市では多極ネットワーク型コンパクトシティのまちづくりによる“居心地の良い、ひらかれた”新しいまちづくりが進められている。中心拠点である小諸駅周辺の公共空間を活用した官民連携による新しいまちづくりに向けソーシャルグッド活動の種を“まちたね”として、その支援を社会実験として取り組む「こもろ・まちたねプロジェクト」が令和 3 年からスタートしています。この「こもろ・まちたねプロジェクト」では現在、社会課題となっている人口減少と新たな関係人口・交流人口づくりの展開、子育て・家庭教育支援、ゼロカーボンシティ(脱炭素型まちづくり)への転換などに対し、多極ネットワーク型コンパクトシティのまちづくりによる対応策を試みており、その効果が小諸市内全域に展開することを目指しています。具体的な活動として、駅前にある公共施設・公共的空間を活用し、駅前に集まる様々な人々とのつながりを深めながら、官民連携による様々な社会実験を行い、効果を確認しています。「交通社会実験」ではスマートカート egg、EV バスによる新交通の運行、LINE 公式アカウント「信州こもろ・こま〜す」での情報発信によって、駅前に集まる人々の”新たな発見”と”体験”を促進し、小諸に好感を抱いてもらい関係人口・交流人口の増加を図ることを目的としています。民間の力(資金・ひと・ノウハウ)との競争のまちづくりは大町市も大いに参考にすべきと感じました。また、EV3輪カート「スマートカート egg」に実際に乗車し、小諸市駅周辺のまちをめぐることで「小諸市に好感を持つ」ことを実感として感じ取ることが出来ました。

(大竹 真千子)

今回小諸市の取り組みを視察させていただいたことで、MaaS＝次世代公共交通への意向のスキームの一部を理解することができた。他市のスキームについても引き続き学ぶ必要があるが、DX(デジタルトランスフォーメーション)による、公共交通を利用するための素養として、情報を管理する仕組みとは一体で施策を進める必要があることを確認できた。また、どういった事業者が関わることで仕組化することができるかを確認することができた。まちづくり会社の関わりもひとつもポイントであった。社会実験の段階で、どのような人が、どのようなところで、どういった目的で利用するかデータを取ることができ、そこから新たな、コース・エリアにどの乗り物を配置していくかを読み取ることができる点についても今後の動きを注視したい取り組みであった。

(中村 直人)

観光向けの取り組みが多かった。電子化することで、利用者の利便性が向上するのはもちろんだが、行政、サービスの提供側としては、詳細なデータが蓄積されていくことが素晴らしいと思った。それらを活用しながら次の施策の方向性を検討していることが重要。

デマンドタクシー、1人乗車あたり1300円ということで、かなり効率的な運営。乗り合わせは必ず00時、30分の時間でという約束事を決めているらしく、それが乗り合い率の向上に繋がっているとのこと。

(西澤 和保)

公共交通に関して実証実験を通じて、効率性と利便性を高める目的意識をしっかりと定めているように受け止められる。

デマンドタクシーなどの公共交通については、市民の足としての利用と観光面と絡めての利用を考えていることについては、今後のとりくみの成果を興味深く探してみたい。



② 高野不動産のおしゃれ田舎プロジェクトについて

おしゃれ田舎プロジェクト、若い世代が訪れたい「まちなか」を創出し、田舎で創業・起業を希望する人々を支援することを目的としている。既存の事業主と新規創業者が協力し、地域を盛り上げながら経営を軌道に乗せる仕組みを構築しており、空き店舗を活用した新規店舗の開業支援や、地域全体で商業活動を活性化させる企画が展開されている。また、歴史ある建物をリノベーションし、新旧が交わる魅力的な商店街を形成する動きも進んでおり、移住促進にもつながっている。



日本茶もサイフォンで抽出する「彩本堂」
古民家を再利用したカフェ



花屋とカフェ「FLORO cafe(フロロカフェ)」
以前の店「スナックタ子」の看板はあえてそのまま

《 所感 》

(山本 みゆき)

「おしゃれ田舎プロジェクト」では元小諸市職員で現在、不動産業を営む高野氏のお話を伺いました。古いものには価値がある、「風情」や「歴史的」、「文化」はすぐ作ることは出来ず、昔から大切にされ、守り伝えてきた背景があるため、非常に重要なことで、観光コンテンツとしても期待ができるが、ただし、それだけで人がいなければ地域が発展することはないというお話に共感します。風情ある建物が利用され、そこから「楽しい」「面白い」「行きたい」などポジティブな言葉が地域の人から発せられるようになれば「イイまち」として認識され、その言葉を耳にした人たちが出かけてくれるようになると話す高野氏の熱量が伝わってきます。実際に小諸市で空き家を利用して開業した店舗は30店を超えて増え続けているそうです。「行政の取組みにはせず、あくまで一人のプレイヤーとして」と熱く話す高野氏のように、民間で動ける人材を大町市も必要としています。高野氏は元市の職員であったことの信頼も高いと感じました。

(大竹 真千子)

以前小諸市役所の職員であった高野不動産の高野社長の、小諸市に対する愛着のたまものだと感心したが、高野不動産としての事業性についてはまだまだ、収支のバランスの不具合が見て取れた。但し、着目点としては面白く、まずは1つの通りに特化して、開業者と空き施設(住居・店舗)とのマッチングをしている点については興味深かった。空き施設の利活用に関するニーズ調査についてはどうしても事業化できない部分であることから、この点においては行政が担って欲しいと感じた。また、参考となる動きとしては、このプロジェクトに関わった人たちが、プロジェクトを通じて交流できる形となっているところは良い取り組みだと思った。

(中村 直人)

情報発信については、御代田町を参考に。地域の新規出店のサイクルもすでに自律的になり、呼んできた事業者がまた新しい事業者を呼ぶ段階になっている。重要なのは、どこかでシス

テムが自律的になっていくことを志向していることだと感じた。新規出店者に対しては、高野さんが融資の相談にもついていき、一緒に事業計画を書くということで、伴走的なサービスが重要だと感じた。街中を案内しながら聞いた話だが、新規出店者にはあえて商店街の地元住民から見てもわかりやすい出店場所をおすすめするそう。地域が変わった、と地元住民が実感できるための取り組み。

(西澤 和保)

近年の近隣地域(軽井沢周辺エリア)の発展も相まって、注目されるエリアとなっているのではないかと考えられるが、小諸市においては、元行政職員がまちづくりのために自らキーマンとなり不動産業を通じて、市が目指すまちづくりの方向性と起業する方への支援を行うことで多角的に取り組みがなされている印象を受けた。

また、開発エリアを定め集中的に取り組むことで、近隣住民や近隣商店へ新規出店を印象付けることができ、注目度や周辺住民の認知度も高まっていることが新たな出店を呼び込むことになっているものと想像される。

両市の取り組みにおいて共通していることは、起業する方との間にキーマンがしっかりと介在し、行政や金融機関、オーナー(家主)側とマッチングさせていることが成果となっているものと思われる。

大町市としての取り組みにおいては、行政の枠にとらわれることなく、柔軟かつ民間事業者と金融機関を連携させるバイタリティーが求められる。

もっと活動的に自由に動く職員が必要と感じた。

道の駅・八千穂高原、道の駅 ヘルシーテラス佐久南

道の駅・八千穂高原



道の駅 八千穂高原は、長野県南佐久郡佐久穂町に位置する道の駅で、2024 年 9 月にオープン。南佐久郡 6 町村(佐久穂町、小海町、南相木村、北相木村、南牧村、川上村)の玄関口として機能し、地域の特産品や観光情報を発信している。

主な施設・サービス

- ✧ 直売所「みなさくマルシェ Bloomin」:地元農家の新鮮な野菜や果物、特産品を販売。
- ✧ レストラン「BISTRO 8」:地元食材を活かした料理を提供。佐久穂豚のトンカツや信州サーモンの刺身が人気。
- ✧ カフェ「やちカフェ」:オリジナルブレンドのコーヒーやスイーツを楽しめる。
- ✧ 屋内交流スペース:子ども向けの遊具やクライミングウォールを備えた屋内型公園。
- ✧ アウトドアショップ「mont-bell」:登山やキャンプ用品を販売。
- ✧ EV 充電設備・車中泊スペース:長距離ドライブにも便利な設備を完備。
- ✧ ドッグラン:大型犬も利用可能な広々としたスペース。

道の駅 ヘルシーテラス佐久南



道の駅 ヘルシーテラス佐久南は、長野県佐久市に位置する道の駅で、「健康長寿」をテーマに地域の食や文化を発信する拠点。中部横断自動車道 佐久南 IC の正面にあり、軽井沢や蓼科方面へのアクセスも良好。

主な施設・サービス

- ✧ ふるさと自慢館:地元農産物や加工品を販売。レタス、キャベツ、ミニトマトなど季節の野菜が豊富。
- ✧ 郷土料理レストラン「咲恋(さくこい)テラス」:信州蓼科牛や信州米豚を使った料理を提供。
- ✧ 軽食コーナー「恋花(こいばな)カフェ」:地元農協製造の「望月高原ソフトクリーム」などを楽しめる。
- ✧ 加工体験室:そば打ち教室や伝統料理の体験イベントを開催。
- ✧ ふれあいパーク:遊具や芝生広場があり、家族連れにも人気。
- ✧ 無料休憩所・情報コーナー:佐久地域の観光情報を提供。

《 所感 》

(山本 みゆき)

大町市では地域高規格道路「松本糸魚川連絡道路」の建設に伴い、新たな「道の駅」の建設も計画されている。2つの道の駅を視察することで、大町市にどのような「道の駅」が求められるのか大いに参考になりました。

道の駅・八千穂高原は昨年9月にオープンしたばかりです。八千穂高原ビジターセンターも併設しており、佐久穂町の観光協会が南佐久エリアの観光情報を発信しています。敷地内にアウトドアショップとしてモンベルがありました。大町市でも民間事業者と連携することで地域の魅力をさらに引き出すことができるのではないかと考えます。産直所や食事処、コンビニがある道の駅の2階には屋内交流スペースがあり、雨でも楽しめる屋内型公園として遊具やキッズトイレ等もある優しい施設となっていました。大町市でも雨天での観光拠点としての機能も新たな道の駅には一考の価値があると思いました。

道の駅・ヘルシーテラス佐久南では「健康長寿」をキーワードとし、地域内外の人やモノ・情報をつなぎ合わせるゲートウェイ型としており、重点道の駅にも選定され、災害時には防災拠点としての役割も担います。交通・物流・人流の拠点として大町市でも道の駅に防災拠点としての役割を期待します。

(大竹 真千子)

(道の駅 八千穂高原)mont-bell のアウトドアショップ、並びに直売所、カフェ、コンビニを併設した道の駅で、2024 年 9 月にオープンしたての道の駅。カフェの店員さんたちに話を伺うと、中部横断道が、現在、八千穂高原 I.C 止まりとなっていることから、寄ってくださる方も多いのではというお話もありましたが、オープンからかなりの来客数となっているようで、道の駅に寄る客数からも、期待の「道」であることが伺えた。施設も新しことから、運営における不具合はみることはできなかったが、やはりこういった事業者が運営してくれるかは重要だなと感じた。

(道の駅 ヘルシーテラス佐久穂)ヘルシーテラス佐久穂については、にぎわいある道の駅であるという話を聞いていたので、楽しみにしてはいたが、今回の視察では八千穂高原の運営の方が、円滑にまわっている感じを受けた。ヘルシーテラス佐久穂を見たことで、余計に事業者によって雰囲気が変わるであろうことを感じた。直売所のスペースが広がったことで、別の日に訪れればまた違う様相を見ることができると興味があったが、道の駅内にこういったコンテンツを置くのかについては改めて考えさせられた。

(中村 直人)

建設当時は高規格道路から道の駅まで車が連なり、30 分待ちだったこともあるそうで、非常に人気。店内にボルダリング施設もある、大きなモンベル店舗が人気。県外から軽井沢へ向かう観光客が皆寄る位置にあるということも集客が良い要因ではないかとスタッフは言っていた。当市においても、白馬へ向かう観光客に訴求するような施設とすることは、誘客のために重要な視点かもしれないと思った。

ヘルシーセンターは農協が力をいれている施設の印象で、観光客と地元のニーズと両方をとっている施設だった。

(西澤 和保)

(道の駅 八千穂高原)中部横断道の今後の開通も視野に昨年 9 月にオープンした新しい道の駅。民間事業者が指定管理となっているが、周辺観光ともリンクさせていることや、有名アウトドア用品店が大規模に出店していることもあり、平日の割には集客も多く見受けられた。

山梨県までの開通にはまだ時間がかかるものと思われるが、現状の道路網としての立地条件も好適地となっているものと推測される。

中部横断道開通までは、10 年余りを要するものと思われるが、アウトドアショップへ訪れる客もいることから、相乗効果も取り込めているものと思われる。

(道の駅ヘルシーテラス佐久南)地域の特産品や周辺の物品の取扱いが非常に多く、買い物を目的とする方には魅力となっているものと感じる。浅間山を見上げるロケーションも素晴らしい。

(※2 日目 二條議員は議長公務のため別行動)